

放浪の先に出合った 神の器としての生き方

生きる意味がわからず、世界放浪の旅に出た青年は、英国で運命的な出会いを果たす。生涯の伴侶、そして自己を神の器としてささげるといふキリスト者としての生き方。やがてスイスの地で、心身に重い障がいをもつ方々の施設で働く中で、アーティストとしての素質を見いだされ、アートセラピストとなった。

妻(左)と



スイス日本語福音キリスト教会／スイスブルーリボンの祈り会代表、リトグラフアーティスト

松林幸二郎

青年は荒野を目指す

スイスアルプス特有の抜けるような蒼空の下、その日も私たち夫婦はケーザーリユック（標高二六七メートル）の頂を目指して急斜面を登っていました。中腹に建つ小屋の前にシュワちゃん（米俳優のアーノルド・シュワルツェネッガー）そっくりの男性が立っていました。彼と話しながら、驚異的な体力と精神力はどこからきたのか、道中何を考え、出会う人々とどんな会話をしたのだろうかと考えているうちに、いつの間にか若かりし日、三年半かけ四大陸をリュック一つで放浪した自分の姿とオーバーラップしていました。

万博の余熱が残る一九七一年三月、芹沢光治良の文学を通して西欧への憧れに胸を膨らませ、その頃時代を風靡した五木寛之の冒険小説『青年は荒野を目指す』の出で立ちで、私はヘルシンキまでの片道切符を手に、ナホトカ航路の貧しい船客となりました。当時、立命館大学の夜学で経営学を学びつつ、紙問屋や司法書士事務所勤務していましたが夢を見いだせず、かといって特別な技能や能力も無く、生きる意味や目的を探す



東北スイス・アッペンツェラーランドの自然

プロフィール

松林 幸二郎 (まつばやし・こうじろう)

三重県津市生まれ、岐阜県瑞浪市麗澤瑞波高校卒業、京都で紙問屋、司法書士事務所での勤務を経て1971年世界放浪の旅に出る。3年半後に帰国、津市でお好み焼き屋を営む傍ら日本福祉大学に学士入学し、障害者福祉を学ぶ。1977年スイスに渡りスイス人女性と結婚。30年間、トイフェン村重度心身障がい者施設にアート・セラピストとして勤務。その間、3人の娘に恵まれ、それぞれの伴侶の間に6人の孫が誕生し今日に至る。1997年にリトグラフ画集『私のアッペンツェラーランド』を出版

ために放浪の旅に出たのです。求人難の時代で、私のような人間でもいくつもの就職口はあり、帰国後の就職には心配いらなかったのが追い風ともなりました。

高度成長期が始まった頃の七〇年代の日本はいまだ貧しかったのですが、夢がある時代でした。そんな時代背景の下、私のように多くの青年が将来の青写真を描くことも無く、憧れの世界に飛び出していったのです。高卒の初任給が二万円に満たない時代でしたから、その頃いちばん安く西欧に行くには、共産国であったソ連を船、シベリア鉄道、そしてアエロフロート（航空会社）を使って通りフィンランドに渡ることでした。二年間働いて貯めたお金十万円では片道キップを買うのがやっとでした。その頃、母は持ち金も無く旅立った私が、一年もせずに帰って来ると予想していたようでしたが、私は放浪の旅がもつ魅力に憑かれ、帰国して現実に対峙する勇気を失っていききました。欧州、北米、中南米、中東と五十五の国々を、ニューヨークやマサチューセッツ州でコックをして貯めたお金で旅し続けました。当時の米ドルは強く（一ドル＝三百円）、三か月米国で働く、後の九か月はその貯まったお金で旅行を続けられたのです。欧米の歴史の重厚さを感じさせる都市や開発の魔手の入らぬ壮大な自然に私は身震いするほどの感動を覚えたものでした。また、世界各地で生きる同胞の生きざまにも深く感動し、特に、半年旅した南米では日系人とその子孫にどれほど親切にされたか、今思い浮かべても胸が熱くなる思いです。

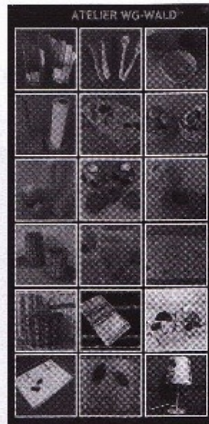
放浪の旅も三年目に入った一九七三年の冬、英国の南西部エクセターの語学学校に入学し、スイスから来た女性と運命的な出会いをしました。彼女とことばを交わすうちに知った聖書の真実、「助けを必要とする人のために自己を神の器としてささげる」というキリスト者としての生き方は、私に深い感銘を与えました。その頃、兄夫婦や母が営む寿司屋が倒産の淵にいたことを知り、三年半ぶりに帰国しました。兄らが作った負債はあまりに多く、彼らが東京に居を移したあと、私は母とお好み焼き屋を始めました。そして、スイス人の恋人と、その価値観と信仰を共有したいと願い、まずは人を助ける福祉を学ぼうと、日本福祉大学に入学しました。空いた時間を銀行や高利貸しに頭を下げてまわりながら借金を返すという生活は、自分の能力と体力を遙かに超えたものでした。

そんなつらく苦しい時、私は週に一度、スイスから一週間かけて届く彼女からの便りに深い慰めと励ましを得ていました。そして三浦綾子の文学と聖書を通じて神の愛を知り、辛苦を克服する力、そして友を得ました。私は彼らの肉親のような友情に母を委ねて、希望と止めどない不安を胸に、今度は放浪人としてではなく、異国で家庭を築かねばならない責任ある日本人として、一九七七年、ヨーロッパに向かいました。この母国での三年間、私たちは一度会ったきりで、週一回の文通による交際でした。

英国での運命的な出会いから七年後、私たちはスイ



松林さんの作品。
ガラス板を用いたリトグラフ「フンドヴィル」



上：30年間勤務したハイムエーベンエツ
アーの作業室
左：心的障がいをもつ青年たちのため立ち上
げた工房での作品

スで結婚しました。無一文の東洋の一青年に、真心をこめて育ててきた娘を嫁がせる義両親の度量の大きさと愛にどれほど感動したことでしょう。ドイツ語ができなかった私に、神は心身に重い障がいをもつ成人のお世話をする施設での仕事を備えてくださいました。数年後、私のアーティストとしての素質を見いだした施設長が作業セラピストとしての職務を与えてくれました。施設の最上階、眼下に素晴らしい景観が眺められる広いワンフロアで、神様が私に下さった賜物たまものをフルに用いながらの、障がいをもった人々との交わりとアートワークは大きな喜びと恵みを与えてくれました。織物や刺繡しゅう、木工や陶芸、藤工芸に絵、そして楽器の演奏、実践的な技術を学ぶ機会が与えられ、障がいのある人々もつ賜物を発見し、彼らの好きなことや能力に合った作業を開発する喜びを与えられた三十年でした。

なぜ苦しみがあるのか

二十一世紀に入ると、九〇年代に経済界を覆い尽くしていたグローバリズムの猛威が福祉の現場にも容赦なく侵入し、権力を握ったマネージャーによってクリスマスチャンの施設長や優れた人材が次々と職を追われました。愛も人の尊厳もないがしろにされる環境悪化の中で、三十年近く無欠勤だった私は体調を崩し、やがて退職を余儀なくされるところまで追い込まれました。神様に「なぜこのような権力と横暴を許されるのですか？なぜ、あなたの目に正しい善人が、抵抗する術のない

障がいをもつ人々が苦しみ悲しむのですか？」と幾度も問うたものでした。

その間に、私たちには三人の美しい娘が与えられ、苦労や心配は当然ありましたが、どれほど祝福されたことでしょうか。娘たちはそれぞれに信仰をもち、教師や看護師として召され、同じ信仰をもつ素晴らしい伴侶に恵まれ人生を歩んでくれています。

また、ガラス板を用いてのリトグラフ（石版画）という特殊な技法を発明した同じ村に住むリトグラフアーと出会いました。この技法を用いて私たちの住む山岳地の自然や村や民家といった風景画を百点近く描き、リトグラフ制作にも情熱を注ぎました。これらは私の五十歳の誕生記念に画集『私のアッペンツェーランド』として出版されました。この作品集は、比類なき創造美にあふれる自然豊かな地に遠く日本から導き、家族を与え、賜物をお与えくださった神への感謝の念、こんな欠点だらけの夫であり父親である弱い私を支え愛してくれた妻や娘たちへの感謝のしるししるしでした。

三十年勤務した職場を退職後、どこにも居場所がなく心的障がいをもつ青年たちのグループホームのために、アトリエを作ってほしいと別の福祉団体から依頼を受けました。そこで私はもてる力と知恵を出し切って工房を作り、軌道に乗せたあと、定年退職しました。

自分には生み出せない愛と力

山の中腹に建つ築三百年の農家に、三十年近く住ん

新刊

出会いの神秘

50冊の『ゲスト・ブック』を紐といて

唄野隆・絢子 共著

50数年に渡る「ゲスト・ブック」(記帳・サインの数は3,830人ほど)は、わが家の宝とっていました。しかし改めて紐といて丁寧に読み直してみました。主の恵みの御業に気付かされて、主を崇め感謝することが多くありました。この主の奇しい導きによる方々との出会いの神秘の御業が、織りなされた恵みをお分かちたく、夫婦の共著となりました本書を、ご一読いただければ感謝です。

B6判 定価1,540円

既刊好評

祈りの花たば 一五集

信仰のヒーローたち (フル書11章講解 上・下)

心に光を 一三

苦しみの中そこにおられる神

十字架の愛 家庭霊想集一五集

福音の喜び ビリビ人への手紙講解説教

秋山 恵一 著
定価各 440円

樋口 真平 著
定価各 1,388円

前川 隆一 著
定価各 880円

藤井 圭子 著
定価 1,100円

金田 福一 著
定価各 1,430円

油井 義昭 著
定価 1,540円

◎定価はすべて税込みです。

一粒社

〒351-0101 埼玉県和光市白子2-15-1-717
TEL. 048-465-7496
FAX. 048-465-7498



上: 5年前に与えられた、1672年に建てられたアッペンツェラーハウス
左: 松林さん夫妻と三人の娘たち家族(後列左から2人目が松林さん)

でいました。アルプスのパノラマを収める広々とした自然の中にある家を私は愛していました。さすがに老朽化も激しく、厳しい冬の間の薪焼べや雪かきは私たちには重労働となっていました。といっても、高家買のスイス。貯蓄も探す時間もなく、引越は私たちには途方もない解決不能な難題となりつつありました。

第三十三回ヨーロッパ・キリスト者の集いの実行委員長として準備に没頭している時、旧知の夫婦から一本の電話が入りました。「高齢の父親が転んで骨折し住めなくなった家だけと買う気はないかしら。コージが三十年前に描いた小さなアッペンツェラーハウスよ!」。無理だと即座に断ろうと思いましたが、集いの終了まで確答を待ってもらうことにしました。まことに不可能を可能とするのが主です。一六七二年に建てられたこの地方独特の小さくて美しいアッペンツェラーハウスを、夢にも思わぬ形で主は私たちにお与えくださいました。

現在、祖父母となった私たちは、三人の娘たち家族と六人の孫のために、自らは生み出せない愛と力をふんだんにイエス様から頂いています。孫たちへは、可能な限りの時間とエネルギーを注いでいます。それが人生の秋を迎えている私たちに神様が与えた責務だと信じています。

神はまことによいお方です。結婚して四十三年、国籍も性格も全く異なる二人が登山という共通の趣味をもち、主が創造された大自然の懐に抱かれ、山登りに十分な体力と気力をお与えくださっておられることは、何という幸いと恵みでしょうか! 若き日に国々を放浪した小さな者を、地球上の最も美しい一角に私たちを導いてくださったことを心から感謝し、主をほめたたえています。

「わがたましいよ主をほめたたえよ。主が良くしてくださったことを何一つ忘れるな」(詩篇103・2)